

LGBTQ+差別問題とカトリック

宇井彩野 (フリーライター)

*JP 通信 vol.239 掲載予定原稿 (転送などのご遠慮ください)

まず、個人的な話から始めたい。

私自身のセクシュアリティの自覚は 20 代になってからで、その時すでにカトリックの職場で働いていた。

子どもの頃から好きだった少女漫画やボーイズラブ漫画のように、いつか自分も誰かに恋をするのだろうと思っていたら、一向にそれは訪れず、自分に積極性がないからだろうか、とにかく誰かと付き合ってみたりしたものの、やはりどうしても恋愛という気持ちにたどり着けなかった。とうとう自分は「恋愛が無い」というセクシュアリティなのだと思えようと思ったけれど、その当時は情報が少なく、「アロマンティック」*1 という言葉に出会えたのは数年後のことだ。LGBTQ+の「Q+」に該当するセクシュアリティだ。アロマンティックとしての気付きの後に、さまざまな自己発見があり、レズビアンセクシュアルにも当てはまることもわかってきた。

自分が性的マイノリティであること自体にはあまり違和感や絶望感はなく、むしろ自分自身のことがわかって安心する気持ちが強かったけれど、ふと当時のカトリックの職場でオープンにできるかと考えた時に、怖くなった。

同じオフィスで働く人たちからは、攻撃されることはないかもしれない。しかし、もしもそれが外部に伝わり、より保守的なカトリック思想の人たちから責められたら、職場が守ってくれることは期待できないと思った。上司や同僚は、私が「変わればいい」と、もしくは、「隠すべきだ」と言ってくるのではないかと。

そう思った瞬間、そこで働くことが心底嫌になってしまった。しばらく後に、私は適応障害と診断され、休職を経て、退職することとなった。

これが私にとって最初の、セクシュアリティとカトリックとのぶつかりを感じた瞬間だ。

岸田文雄首相は 2 月 1 日の衆院予算委で、同性婚などに関し「家族観や価値観、社会が変わってしまう課題だ。社会全体の雰囲気にはしっかり思いを巡らせた上で判断することが大事だ」と述べた。

しかし、首相が「変わってしまう」と言う「家族観や価値観」こそ、性的マイノリティの人権を奪い、時には命を奪ってきたものである。そんな「家族観や価値観」を「社会の雰囲気」を理由に継続しようというのが、自民党政権の考えであると、この発言は如実に表している。荒井勝喜元秘書官の差別発言も、その延長線上にあると言えるだろう。差別的な価値観を温存することに、首相からお墨付きを与えられたようなものなのだから。

議論が繰り広げられている「LGBT 理解増進法」に関しても、ただ「差別は許されない」という文言を入れるだけのことに、大きな壁があるという。実際、「差別禁止」の文言を入れたら、結婚の平等がなされていない現行の差別状態と矛盾してしまうから、さもありなんとも思う。

しかし、マイノリティの人々が差別反対を訴える時、求めているのは「嫌わないでほしい」とか「理解して受け入れてほしい」とかいうことではない。人権が奪われている状態を解消するよう求めているのである。人権が奪われるということは、生きていくことが困難になるということ、ともすれば、命に関わることだからだ。

命に関わるという点で、今、特に深刻な状況にあるのが、トランスジェンダー*2 差別の

問題だ。ここ数年、世界中で起こっているトランスジェンダーヘイト論の潮流がある。「トランスジェンダー女性を本人の性自認だけで女性だと認めたら、男性の体に見える人が女子トイレや公衆浴場の女湯に侵入してくるのではないかと」、「(シスジェンダー*3の)女性の安全を守るため」にトランスジェンダー女性を排除しようという論である。こうした論調に、一部のフェミニストも傾いたことで、事態はさらに悪化している。もちろんトランスジェンダー差別に反対しているフェミニストの方が数が多いが、世界中のフェミニストの1割か2割でも差別者側に傾けば、それは相当に危機的な状況である。実際のところ、ほとんどのトランス当事者は他者の安全を脅かすことなど望んでいない。そんなことをすれば、自分自身の安全も危うくなることは目に見えている。トランス当事者が安全に使える場合は、その人やその時々状況によって違う。危険を感じながらも、その場で取りうる選択をするしかない場合もある。あえて他者の安全を脅かそうとする侵害者はどこにもいるけれど、それはジェンダーとは関係のないことだ。そうした侵害者を取り締まる法律が、トランスジェンダーの権利が確保されたという理由で変わることもない。

このほど問題となっている、カトリック社会問題研究所が発行する雑誌『福音と社会』323号から325号に掲載された記事*4にも、上記のようなトランスヘイト論が見受けられた。この点は、この記事の差別的記述の中でも特に危惧するところである。同記事の、差別用語を平然と用い、セクシズム*5や悪意ある表現を並べ立てる内容には、カトリック内部でもおかしいと気付いてくれる人は少なくないと期待する。しかし、トランスヘイトに関しては、著名なフェミニストすら傾いてしまったのと同じレトリックを用いており、より扇動の強いものとなっている。トランス差別の潮流をカトリックの方向からさらに大きくする一因となるのではと恐れている。

こうしたカトリック方面からの性的マイノリティへのバッシングは、かつての職場で、私が不安を抱いたことそのものだろう。しかし同時に、今回のことでカトリック内部からも、いくつかの力強い協力を得ることができた。

私自身かつて青年のメンバーとして活動し、現在はサポーターとして働くJOC(カトリック青年労働者連盟)では、担当司祭はじめ、全面的に差別に抗議する方向で共に動いてくれている。青年たちの集まりの中でも、LGBTQ+への差別について話す機会をもらえた。

日本カトリック正義と平和協議会*6から司教2人の連名での声明文が出たことも心強い。カトリック新聞*7でも特集を組んでこの差別問題に向き合ってくれている。カトリックも社会の変化とともに変わってきていることを感じている。

もう何年も前のことだが、とある神父が、トランスジェンダーの信徒と出会い、感じた戸惑いを私に打ち明けたことがあった。私が性的マイノリティ当事者であることも知っていて、自分よりも知識があると判断して相談してくれたのだと思う。

年齢も私よりもずっと上の神父が、カトリックの中では若い女性にあたる私にアドバイスを求めて相談するなんて、カトリック社会ではかなり珍しいことだろう。しかし、その時は神父と信徒というよりも、人間同士としての関係性の中で話していたように思う。トランスジェンダーである本人に戸惑いをぶつけるのではなく、他者に知恵を求め、立場の上下を越えて対話するその姿勢に、新鮮な感動を覚えた。

その時の私の回答が十分なものだったかはわからないが、目の前にいる人と向き合うために努力する姿勢は、まさにイエスの生き方だと思う。イエスならばどうしただろうか、と考えれば、性的マイノリティに教会がどう向き合うべきかは、自ずと見えてくるはずだ。

注

- 1 アロマンティック 他者に対して恋愛感情を持たない人、または状態のこと
- 2 トランスジェンダー 生まれたときに認定された生徒は異なる性自認を持っている人
- 3 シスジェンダー 生まれたときに診断された身体的性別と自分の性自認が一致し、それに従って生きる人
- 4 当該「書評」に関する問題点については、キリスト新聞オンラインサイトをまずご覧になることをお勧めいたします。 <http://www.kirishin.com/2023/01/23/58300/>
- 5 セクシズム 性差別、他人に対して、性別を理由に、排除や制限などの不利益を不当に及ぼすこと
- 6 カトリック新聞第 4660 号（2023 年 2 月 26 日発行）、第 4661 号（2023 年 3 月 5 日発行）カトリック新聞（予定）
- 7 <https://www.jccjp.org/archives/info/2870.html>